



義太夫教室のことなど

義太夫協会会長 田 辺 秀 雄

義太夫協会会報
第53・54合併号
平成4年5月22日
社団法人 義太夫協会発行
〒104 東京都中央区銀座
6-18-2 新橋演舞場B2
TEL (3541)5471

このところ本協会の行っている義太夫教室が再び認められて来たのか、盛況で応募者も多くまたその研修態度も中々熱心であることはまことに喜ばしいことで永い間続けてきた効果が現れたと言っておよぼう。この義太夫教室は本協会にとっては、正会員の演奏を公開したり研修発表の場としての国立演芸場の月例会と並んで最も重要な事業である。既に法人になる以前からこれは行われていて、義太夫の愛好者をふやすのみでなく、今日の義太夫界を背負う専門家もここから輩出し、その中には協会の役員も多いという状態であるが、私が会長を引き受けた六年前頃は応募者も定員に達せず、途中で脱落して行く人達も

多いようであった。広大で人口も多い東京で、ただ一箇所、しかも年に一度のこの企画がこの状態であったことは邦楽を愛する私にとってまことに淋しく感じたことを覚えている。だがこのことは義太夫界のみでなく、他の部門でも同じ事で、要するに戦中や戦後に生まれた人達が殆どこの種の音楽や芸能に触れる機会がなく、全く知らないということに原因があるのではないかと私は考えた。これは関心がないということとは異なる。音楽の面でも三曲や唄物はまだメロディ的だから洋楽教育に慣れた人でも入り易いし、現代曲でも洋楽と結合も可能である。だが語り物は本来声楽の分野では最も

重要であるのに、洋楽は器楽的な発展を主としてしまった為に教育などから外されて来てしまった。触れる機会がなく、知らないというものは無に等しい。戦前には町を歩けば三味線や箏の音が聞こえたり、家庭でも誰かが邦楽をやっていた。ラジオも音楽の殆どは邦楽であった。それが戦後は一変した。放送はラジオ、テレビ、衛星も入れてそのチャンネル数は大変な数なのにNHKで僅かのものを余り聞けない時間で流しているに過ぎない。町ではエレキやロックしか聞かえない。しかし義太夫教室に新しい人達が目を向け始めてきたことは、受講者が義太夫を少なくとも理解し、関心を持って来たことを示している。以前は身内や近い関係に昔からやっている人がいて、聞かされている内に自分も学ぼうと言う気になつたくらいしかなかった。歌舞伎や文楽が若者に人気を持ったり、方々で若者達の間に邦楽を見直そうという動きがあるのも見逃せない。こうした機会を捕らえて一層の努力を計ると共に、教授法などにも新しいものを研究、必要なら三味線など簡単な入門曲など作ることも考えてよいと思う。なお教室はいつも協会で実技の講師を厳選し立派な師匠を代わりあって立て、実に丁寧に教えていることは自慢して良い。今後は更にこれをふやすのは難しいとしても、よくある文化センターなどで取り上げて貰ったり、特に地方などでもやりたいものである。

お静礼三小磯ケ原の事

相談役 豊澤猿三郎

今から六十年前程前、帝劇で上演されたのを私は観劇しました。其の時の役割は、お静―梅幸(先代)、礼三―宗十郎(先々代)、お静の子千代松―源平(先代宗十郎)、舅宗右衛門―幸蔵(紋二郎の父)、馬方―高麗造(現幸四郎の祖父)。それ以来五―六十年歌舞伎座では出さなかったと思います。

小磯ケ原と言えば昔は寄席では出たものです。中でも小津賀のは有名でした。震災前ですから小津賀が二十五歳頃でした。

一杯機嫌の小諸節アアここは追分枋方の茶屋でヨ。定連席から「小津賀さん、下の句も頼みますよ」小津賀も困って絃の津賀栄(紋教)を横目で見ますと、左手を膝へ置いて馬方の出の合の手を弾きそうにありませんので、泣いて別れた事もあるヨウチレンチンチンリチリチン」津賀栄が得意のよい音で馬方の合の手を弾き出しました。客席のここかしこから「小津賀さん、津賀栄さん、有難う有難う」の声です。高座と客席のこんななごみもあってよいと思います。ただし「小磯」は、

語り物が軽いので、真打の時には出しません助場(切三)の時に語ります。

楽屋で着更え乍ら津賀栄が小津賀に「糸ちゃん今夜の馬方節よかったよ」「姉さん、合の手弾いて下さりゃいいのにひどいわ」「あれもごひいきのお礼だよ」

楽屋口へ「お待ちどう様」とお鮎の一尺二三寸もある大きな皿を屈けて来ました。そして洒落てるじゃありませんか。載せた紙に「馬方さん江 定連より」ですッて。昔は現在のようにサンドイッチ、かき餅、お菓子等いろいろの物とちがい何でも弥助(お鮎)です故、時によると五皿も六皿も入りますので後から届いたのは手をつけず、きれいに其の儘お茶子席へ上げたものです。

ついですので書きますが、宮松亭さんでは、中入にお菓子は売りますが、かき餅は売りません。真打が語っている時に大勢のお客様がバリバリかき餅を食べられては邪魔になるので売りません。

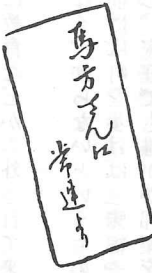
話は違いますが、私が新宿に住んで居まし

た当時、宮嶋和紅さんとおっしゃる御連中が、奥様が三味線の名手でした。御主人が「堀川」を語る折、家内に弾かせたいとの事に大賛成で、津賀太夫師に頼まれて居ましたのでツレ弾きを十六、七才の津賀吉(津賀昇)に仕てもらいましたのが私の失敗でした。五十才位の名手の奥様より子供のような津賀吉の三味線の方が上だったのです。奥様はそれきり三味線をおやめになりました。その後中西紫孝さんと申す御連中が、全快祝で「野崎」をお語りの時、ツレ弾きを津賀昇にとの御希望に、おっしゃるようになしまして、後日理由を聞きましたら、中西さんが私の病気が癌ですと聞いて津賀昇がホロッと泣いてくれたという事でした。津賀昇よ、早く快くなつて毎月の国立へ出て腕を奮って下さい。御退屈様でした。

一杯きげんの小諸節

アアここは追分

泣いて別れたこともある



義太夫教室 OBアンケート

〔1期から44期まで〕

二月二十九日の義太夫教室OB演奏会の御案内といっしょに、教室OBの方にはアンケート用紙を同封しました。返信用切手も入れてないことだし、十人も返ってくれば、せめて住所だけでも御連絡いただければ……：正直こんな気持ちでした。ところが、豈はからんや、続々とOBアンケート係宛の封筒が相次ぎ、ファックスでの返信も混じって、うれしい誤算でした。これはつまり、教室がいかにいい思い出になっているかの現われなのでしょう。アンケートの一部を御紹介します。

〔解答数 56〕

義太夫とのかかわり方について(複数解答)

稽古している(15) 今は稽古していない

(28) 稽古したい(10) 見たり聴いたりするだけ(25) 見たり聴いたりすることもない(2) ナマで文楽を見る(34)

ナマで歌舞伎を見る(46) ナマで女流義太夫を聴く(30) テレビは見るようにしている(32) ラジオは聴くようにしている(13) その他「テープ・CD・本」

同窓会を作ろうという声がありますが、

賛成(33) 反対(0) どちらでもよい

(20) その他(0) 無記入(3)

世話人として手伝う(5) 同窓会があるなら入会する(33) 入会しない(1) その他「内容による・無記入など」

同窓会が出来るとして、会費はどの位が妥当(活動にもよりますが)だと思われませんか?

年額五百円(3) 千円(27) 一千元(17) それ以上(1) 無記入(8)

義太夫教室の思い出をひとこと。義太夫教室に対する提案・ご意見等ございましたら。

(末尾の数字は受講期)

* 沢山あります。第一回の最初の稽古の日! 大根河岸(京橋)川口邸にて。(1)

* 教室出身者への提言―次の世代に伝えていくために―段数は少なくてよいから、得意とするものを、自他共に認められるまでにマスターして頂きたい。(4)

* 農林業技術指導(奉仕)のため25年間、主として東南アジアに向向したのでご無沙汰、それだけに義太夫が貴く聴こえます。(26)

* 文楽・歌舞伎がよく分るようになり、また邦楽全体に愛着が出てきました。(27)

* 初めて語りや三味線に挑戦した時は、急に自分の世界が広がったような新鮮な驚きを感じました。(28)

* お教室で習った「野崎村」「太十」の語りは、その後全くおさらいしていないのに、まだに口をついて出てきます。(37)

* 良い仲間(悪いのも居ますが)が沢山出来たことが、望外の喜びでした。(38)

* 教室に通いつつ、長唄・お箏をはじめ、おかげで今では邦楽の評論にも手を染めてお

ります。教室は現在の私の出発点。(38)
* あこがれのあの太棹に自分の声を乗せて出せた時のあの感激。まこと六十の手習いに極れりと通いつめたお稲荷さんの二階生涯の思い出です。(39)

* あー、とっても日本人してるという感じで楽しい日々でした。(39)

* おかげさまで床本が読めるようになり、竹本へのダメだしなど、やりやすくまりました。近松座の文芸部の仕事に大いに役立てることができ、感謝しております。(40)

* 教室に通い始めて間もなく具合が悪くなり(実はつわりだったのです)5、6回しか行っていません。OBの聴講可とありましたので、子供が大きくなったら行ってみたいと思っています。(41)

* 大勢で大声を出したのは気持ち良かったです。教室でのお話は業界用語をあまり使われると初心者には意味が通じないので気をつけてもらいたいと思います。(42)

* もっとうまくなったらプロになりたいが会社を辞める訳にはいかない。定年後では20年以上先だし遅すぎる?!(42)

* 自分で語るようになるとは思ってもみませんでした。これからも教室が長く続いて義太夫が好きだという人が増えたらいいなと思っています。(43)

* 卒論で義太夫節の発声についての研究を行なうことができました。満足しているところです。この研究のきっかけとなったのも義太夫教室です。(44)

義太夫教室

第一期開講と一・五期生

常務理事 竹本弥乃太夫

銀座四丁目から歌舞伎座方向へ行き、昭和通りの手前に、三原橋があった。今警察になつてゐる所である。三原橋の下は、皇居の外堀で川が流れてゐた。戦後の傷痕はまだ癒えない。川の水は荒れ放題で、メタンガスがブクブクと泡を立てては消えていて、臭かった。その警察の角を左に折れ、三〇〇メートルほどいった左側に、朝日クラブという貸席があった。

昭和二十三年六月十五日(火)義太夫教室第一期発会式の会場である。応募した生徒は四人、生徒より先生や関係者の方が圧倒的に多かった。なにしろ学校形式で、義太夫というものを、若い人達に普及させようとした初の試みでもあるから、関係者の意気込みたるや大変なもので、生徒数四人は御の字、若い人が義太夫をやってくれるということだけで、喜びに満ちてゐた。

現在の義太夫教室は、義太夫協会の事業としてゐるが、本来は熱烈な義太夫愛好家、坂本あるを(後の豊竹湊太夫)氏が中心となり、

積極的に義太夫関係者や各界に呼びかけ、従来の旦那芸から逸脱した正統的な義太夫節の研究と稽古に、義太夫教室設立の必要性を説いて廻り、その献身的な努力が実を結んだもので、いわば個人の設立によるものなのである。

さて、応募した生徒は、橋本晴雄氏(橋本ケミカルの若主人)、久保正之氏(弁護士の卵)、現在国立劇場の鷲尾星児氏、どん尻が西野宗祐(後の竹本弥乃太夫)の私である。やがて定刻となり、川口子太郎氏の司会で始まる。この方については、色々な思い出話があるので、またの機会にお話しようとして、氏は、西の武智(鉄二)、東の川口と言われている歌舞伎の評論家であり、鬼才であることのみ紹介しておく。手元に、当時の私の日記があるので引用してみる。

クラブの二階は、五十畳位の広さがあり、正面は障子が閉めてあった。西日が入るせいもあったが、障子を明けると、その下が川なので全く臭い。(当時は、まだクーラーもな

かったので、しめっきりになっていて、すごく暑かった。)

川を背にして正面中央に、野沢吉二郎氏、右側には坂本あるを氏、評論家の、あんつるコト安藤鶴夫氏、劇評家三宅周太郎氏、コロンビアの森垣二郎氏、文楽の野沢綱造氏、川口子太郎氏、児玉琢磨氏、近松研究家の高岡宣之氏、左側に移ると、和服姿の豊沢芳太郎(後の二代目松太郎)氏、竹本土佐広氏(現)そして、少し遅れて席に着いた豊沢猿幸氏、

(鶴沢三生氏は、欠席)以上の方々居並ぶ、後ろのほうには、なんだか関係者が、大勢いられて、我々生徒を取り囲む形になっていた。坂本氏の教室設立についての挨拶、吉二郎氏の教科内容についての、説明などがある。次いで生徒を代表して橋本氏「今後とも、どうぞよろしく願ひ致します」皆一斉に頭を下げる。生徒一人一人は、吉二郎氏と親しく挨拶を交わす。先生方のどの顔も皆、喜色満面に見受けられた。「さアこれからしっかり勉強して下さい」にっこり笑顔でわれわれを送ってくれて夕刻散会する。

……さて、いよいよ数日後の実習日に移る。教科内容は次のごとし、即ち

《教場》中央区京橋横町三一五(川口子太郎氏宅の前)、飯泉ますみ宅の二階八畳の間

《授業》授業は毎週月、金、午後五時半より九時まで。(途中休憩十五分)期間は三ヶ月である。

《実技》時代物として《絵本太功記 十段目》

担当：鶴沢三生師

世話物として《新版歌祭文 野崎村》

担当：豊沢猿幸師

《講義》義太夫の《基本的発声、義太夫節の

曲節分解》

担当：野沢吉二郎師

教場は、京橋大根河岸にある。銀座通りを境にして、京橋川の東側が竹河岸、西側を大根河岸といい、広重の江戸百景にも残っている。いま高速道路わきに、江戸歌舞伎発祥の地の碑が立っているが、そのわきを入った所で、当時は横町と言った。飯泉さんのお宅は、製本屋さんで、奥さんが義太夫をなさっていた関係で、自宅を開放してくれたのである。今までは、母や祖母の口ずさむ義太夫を、聞き覚えていた私だったが、これからは、言わば本格的に習い始めたので、多少の戸惑いがあったが、割合に入りやすかったし、何んの違和感もなく、非常に嬉しかった。

発会式には間に合わなかったが、太田正文氏が入ってきた。彼は当時経済学博士として著名な、太田正孝氏の長男である。これで生徒は、つごう五人となった。何回か熱心に稽古を重ねて行く。今とは違って、テレビもなし、また民放もないので、マスコミもそんなには騒がなかったが、それでも、NHKがラジオの録音をとり、また読売新聞社が漫画家を連れて取材に来た。社会風刺画の近藤日出造である。近藤勇によく似てエラが張っていて柄の大きい人だ。私の横で盛んにスケッ

チをしていた。

素義（素人義太夫のこと）で、金川文楽という人がいた。名前が文楽というから、かなり義太夫にのめりこんでいたんだと思う。やや赤ら顔で、萩野佑仙のように、てかてか頭いつも笑っているような顔をしている。京橋に近く、金光教のあるところが自宅で、教室の噂を聞いて、いちはやく駆けつけた。今度、私が君たちに、義太夫の笑いを教えよう、健康の素、笑いは、腹の底から声を出すんだよ、いいかね、ワッハッハッハッハッハッハッハ、さあ西野君、大きな声でやってみたまえ”私が躊躇していたら、坂本さんが飛んで来た。”おいおい金川君、若いこの人たちには無理だよ、第一、君は先生ではないんだから、やめてくれよ”文楽さん大いに連れて”ヤアすまんすまん”と謝った一幕もあった。そのほかにも、もの珍しさもあって、入れ替わり立ち代わり、いろんな人が見学に来た。授業も何回か進んだある日、発会式に列席された竹本土佐広師が、模範演奏として義太夫の弾き語りをされた。曲目は《酒屋》である。鐘に散り行く花よりも、からお園のくどきまで演られたが、その枕のよかったことといったら、それはそれは、女義太夫の魅力良さを、十二分に発揮されて、これ以上の幸せはないくらい、深く感銘した。何しろ、一ツ間と隔てていないところで、師匠の義太夫を正座して聞き入ったのである。上手な方だな、と強い印象をもったものだ。後で母に聞いたら、その人は昔、伊達子といって、浅草

のパテリ館で鳴らした娘義太夫の一枚看板だと教えてくれた。ただただ今までの聞き覚えでいたのと違って、目の当たり本当の義太夫を聞かせてもらい感激してしまった。

さてこの間取材された、NHKのラジオ放送を聞いて入ってきた生徒がいた。現在の二松学舎の、佐々木明郎氏である。だから彼を、義太夫教室一・五期生と呼ぶことにしている。そうこうしているうち、発表会の日が近づく。《義太夫教室第一期研究発表会》

昭和二十三年十月十日(日)

於丸の内保険協会講堂 十二時半開演である。会場は、現在跡形もないが、鍛冶橋からJR有楽町駅の北寄りの所にあった、焼け残った講堂である。

第一期生の演目は、《野崎村》と《太十》がそれぞれ掛け合いである。三味線は、野崎村が豊沢猿幸師、太十が、鶴沢三生師。小生の役どころは、野崎村のお光と、太十の久吉が振り当てられた。あとは、先輩の方々の応援で、加賀見山の草履打、安達三の袖萩祭文、忠臣蔵七段目の掛け合いが出た。

我々のその時の配役は、あまりよく覚えていないが、野崎村は確か、太田さんのお染、又佐々木さんの、後にも先にも、これ一回だけの、久作である。いづれ確証を得たいと思っているが、ともかくも生徒が少なかったので、先輩方が付き合っただけで、どうやら発表が出来た次第である。

振り返って考えると、現在は、義太夫協会の傘下で、義太夫教室が、毎年行われ、その

都度、応募者数が四、五十名にも上る大盛況である。昔は、ちらしを一万枚も刷って浅草橋駅で配っても、応援者ゼロ、来る年来る年、閑古鳥が鳴いた。義太夫なんて若い者には見向きもされなかった。それを思うと、誠に昔日の観がする。そうして昭和二十三年から数えて、今年平成四年で、足掛け四十四年、即ち四十四期生が卒業された。思えば義太夫に取り付かれ、これを業としている自分を改めて見直してみても、いささか感慨無量の心境になっているのである。

第45期義太夫教室まもなく定員

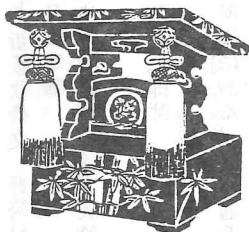
お申込みはお早く!!

語り物の代表で、庶民の生活感情を最もよく表わす義太夫節の真髓に、講義・実技の両面から迫る、初心者向けの入門講座。まもなく定員です、受講希望の方はお急ぎ下さい。

詳細は (三五四一) 五四七二

義太夫協会

あなたの声で
義太夫を
あなたの手に
三味線を



こんなにも活発です

義太夫教室諸先輩

義太夫教室卒業後も、稽古を続けたり、同期会のような集まりを持つ先輩がいます。活動の様子などを書いて頂きましたが、これまた編集部のお考えは甘かった：：どなたも皆さん一様に長い長い原稿、これもいかに楽しんでるかの現われなのでしょう。そんな訳で、掲載にあたり大幅にカットせざるを得なくなりましたことをお詫びいたします。やはり同窓会を作って、同窓会報を出すべき運命なのかもしれません。手始めに、同期会の代表者が発起人になって話し合いの場を設けたらどうでしょうか、御検討下さい。

藻汐会のこと

竹本弥乃太夫を中心とした、義太夫の語り、三味線の稽古機関を、藻汐会と呼んでいる。義太夫協会の法人化を機に、再開した義太夫教室に、折から幾分古典の復活の兆しが芽生え初めてか、四十人もの大卒応募者が殺到し、協会事務局はうれしい悲鳴をあげた。昭和四十七年である。そうした原因は、教科内容を従来の教室の特徴である講義と、語りの他に、今回から三味線の実習を加えたことである。語りの先生も決まり、講義は野沢吉二郎師の意志を継いで、及ばずながら、私が担当する

ことになった。ところが三味線の教え手がない。誰かお願い出来ないかと呼びかけても、三味線の手ほどきほど面倒なものはないと、先輩方は皆敬遠した。結局言い出しっぺの私がやることになる。そうして毎年ごとの教室は、三味線担当は弥乃太夫ということになってしまった。陰では太夫のくせに三味線を教える、といって非難の声が入ってくる。しかし私は怯まなかった。これまで、義太夫の三味線を素人に教えることは、プロ以外にはないことなので、あえて若い人達に、三味線を持たすことは、義太夫の普及にもつながるし、三味線の楽譜の、朱の習得の必要性と、リズム感のよい若い人達が、ギターでも弾く感覚で、太棹を覚えてもらおうと、音楽的要素のうえに立って教えることにした。語りにウエイトがおかれる義太夫節の三味線ではなく、単なる楽器としての太棹三味線、という観念で始めた。もちろん義太夫がよく解ってくれば、それなりに上級のコースを選択すればいいことで、まずは成功した。そうして毎期、教室の卒業生の中から、何人かの生徒が私の門下生になる。これまで多くの人が出入りしたが、女性は何と言っても、結婚、出産、育児、入学等の過程を経なければならぬ障害があって、長続き出来ない嫌いがある。もち

ろん良き協力者がいれば話は別だが、そこへゆくと 男性は古い人達がかかり続けている。また門下から離れて、他の師匠についてプロになった人も多い。私の藻汐会は、三味線であって来た人と、語りであって来た人、あるいは両方と男女様々である。だから年一回の定期公演や、ゆかた会などの義太夫勉強会には、会員同士でペアを組むことができる。

今年も九月二十三日の証券会館ホールでの公演に向け、技術は未だしもでも、お互い稽古しあって頑張っている。また近い将来、地方に残された伝統的な人形座や農村歌舞伎との提携と、広範囲に義太夫の発展計画を考慮中である。

「メモ」

義太夫教室OBの老舗ともいうべき藻汐会は、今年15周年を迎えます。9月23日はその記念公演だそうです。大きな発表会のほかに毎年ゆかた会も開催、会報はこの2月で既に21号発行。今回は、指導者であり第一期卒業生でもある弥乃太夫師に寄稿して頂きました。

七宝乃会

27期生 川鍋 淑子

今は亡き、文楽の同好会で知りあった友人のすすめで二十七期生に入れていただきましたが、日頃、文楽で拝見していた鶴澤重造師が直接御指導下さることに、もう感激。しかし、聴く義太夫はあんなに好いのに、自分

で声を出すのは、手も足も出ない有様で、これは大変なことを始めてしまったと、内心困惑もしました。

新義太夫教室として軌道に乗りはじめた教室は、世間的にも注目され、NHKで稽古風景が十五分も放映されたり、日経新聞には写真が大きく載ったりで、内緒で始めたことがまわりに知られることになってしまいました。もう引くに引けない思いで、旧演舞場の稽古場に通いました。卒業公演の準備の一ヶ月は充実した日々で、それが義太夫及同期の仲間から離れられなくなって、今日まで続けてきた第一歩だったと思います。大阪の文楽へ出演の重造師に代って、ずっと助手として稽古場にいらしていた朝重師が卒業公演の面倒をみて下さいました。その御縁で、朝重師のところへ個人稽古に伺う事になったのです。

二十七期生主導型で始まった発表会も、重造師に「七宝乃会」と命名していただき、今年で十六回目を迎えます。三十代の前半から五十代へと移り、二人の親の看病、見送り、仕事の忙しさ等、いろいろありました。義太夫に連なるこの十八年余り、知れば知るほど奥の深い義太夫がなかったらと考えると、それは恐ろしい気持ちになります。私の義太夫小史を書かせて頂きました。

「メモ」

「七宝乃会」は、重造師の芸の紋どころ「七宝」に因んだもので、朝重師も芸の紋としておられます。4月11日、浅草公会堂第二集會室にて第17回の発表会が開かれました

気がついたらもう六年

38期生 小野木豊昭

義太夫……：本当に難しい。なかなか否まわったく思うようにできないけれど、とにかく声を取り上げてみます。すると先生はそれ以上の声を出されます。稽古場の窓ガラスがバリバリしています。自分のテンションがグーッと上がってくるのを感じます。そんな稽古をしていただいた後、しんどいけれど本当に義太夫やっててよかったなと思います。

今、「玉三」「道春館の段」を稽古していただいています。たった三十分足らずの箇所ですが、始めてからもう二年近くになります。しかし一度も飽きたと思っことはありません。いろいろな角度から御指導下さっているからだと思えます。つくづく奥の深いものだと思います。

楽しみはまだあります。稽古での緊張がほぐれた後、先生の修行時代の体験談や昔の名人的方々のお話をうかがうこと。本にしたいくらい貴重な芸談だったりします。

ところでそんなお稽古場には実にいろいろな方がいらっシャっています。NHKの葛西アナウンサーをはじめとして、声優さん、俳優さん、三生師以来の大ベテラン上原さん、皆さんのお付き合いも僕にとってはこれまた楽しみの一つです。

まだまだあります。先生は素浄瑠璃の会に積極的に出ることをすすめて下さいます。年に何回かは友人や知人の前で語らせていただくことが大いに励みにも勉強にもなります。そうそう！忘れていけないのはチャイミングでやさしい姉弟子のおねえさま方、いつもお世話になってます。

僕は教室三十八期生ですが、気がついたらもう六年。あっというまでした。これからもより頑張ります。「志渡寺の段」や「尼ヶ崎の段」が一段語れる日を夢見て。「メモ」

窓ガラスがバリバリいうのは、築地の自治会館、バリバリいわせるのは竹本駒之助師です。毎年、春と秋に行なわれる「大日本素義会」には駒之助一門がいつも最多出演です。

朝一弥会の一年と九ヶ月

42期生 篠田秀一

チョン、チョン、チョン……と柝が入り、太棹メドレーの幕が降りる。長い教室の歴史の中にあって、この期に集ったこの縁を大事にしたいと、OB発表会の終了時に同期会の話が出て、七月九日に発足。会の名称は、四十二期でお世話になった師匠方のお名前「朝重・綾一・弥乃太夫」より一字づつ頂き「朝一弥会」、現在会報の発行は9号を数えています。歌舞伎座近くの喫茶店を借り、コーヒーと軽食を頂きながら、SP時代を中心にレ

コード鑑賞会も、楽しんでいきます。

と、その程度なら、穏やかだったのですが、ついに恐れていたことがとうとう起こりました。「朝一弥会 義太夫自主公演」仲間内で楽しんでる内はよかったのに、ついそこに悪心が起こり、あの親不孝な声を世間に聞かせようと云うのです。平成四年八月二十三日、成城の「砧区民会館ホール」、客席は五百もあろうと云う立派なところ。素人の強み。なんたる大胆。盲蛇に怖じず。あゝ無謀。入場無料(当たり前か? : : : こっから出して来ないか!?) 「揃いの浴衣で極めようよ」など気持はもう一端の芸人。どんな病より恐ろしい「義太熟」ウィルスに冒された私達、勿論未だ未だ未熟もの、とても人様にお聞かせするようなものではありませんが、義太夫に対する情熱は誰にも負けぬと自画自讃。意欲満々。エ、只今よろしいところで、サァいらっしやい。ハイ、お一人さん御案内スィ。

「メモ」
朝一弥会だよりは、3月27日付けで10号になりました。ほかに、義太夫、落語、声色、琵琶など、なんでもありの「ドンチャン会」も、運営の分担もそれぞれの特技を生かして順調だということでした。

教室新米OBとして

43期生 西谷通晴

私の子供の頃、大正から昭和初期にかけて、

今の素人のど自慢やカラオケ大会と同じように大阪市内の彼方此方には素人義太夫大会が催され、夫々その上手さうまさを競い合った程大流行をしていたものでした。戦後は世の中がガラリと変り特にアメリカナイズされ若者達もロックに明け暮れという時代に、今日本の古典芸能のうちでも最も取っ付きにくい義太夫をやってみようとして教室に入ってくる若人達が多勢おられるというところは実に不思議な社会現象と言わねば、でも半面まだまだ日本の若者達にもなかなか良いところがあるな!!と昔人間の私は本当に嬉しく楽しいものと喜んでるところです。

私の場合皆様と多少違って義太夫一家に生れ昭和九年満洲に就職するまでの十九年間毎日毎晩義太夫を聞かされて来た関係で、門前の小僧習わぬ経を読む程度の聴く耳はもっていましたが、どちらかと言えば西洋音楽に憧れてクラシックやカンツォーネを聞く方が好きだし、満洲大連市では社交ダンス教室に通いワルツやタンゴにうつゝをぬかしていた時もありました。それ故義太夫に関しては実際に稽古をして貰ったのは平成二年四月の義太夫一日体験入門が初めて。続いて教室43期生となり舞台上に上って浄瑠璃らしきもので出演したのは昨年二月二十三日の教室新卒発表会が私の人生初体験でした。

教室生徒のうちでは平成二年度私は七十五才でしたから恐らく記録的な最高齢者だろうと思います。まさに七十の手習いで年寄りの冷水ならぬ冷汗をかきかき足のしびれを我慢し

てそれでも楽しく若い人達の仲間に入って大声を張り上げていた約一年間の教室は本当に愉快な楽しい思い出として一生忘れることが出来ません。

私は今年二月二十九日の発表会兼OB会に43期生の新米ホヤホヤのOBとして出演させて頂きました。その時多くの若いOB達が皆さん楽しげに舞台上で張り切っておられるのを見て、折角この貴重な教室を卒業した者同志、以後続いて何とか互いの交流を温め合い、先輩後輩老若男女上手下手の区別なく、ともに楽しい義太夫を高尚な健康的な趣味としてずっと続けられていくためにも教室主催のOB会を更に増やして、せめて年二回ぐらい実施されては如何かと思えます。皆さん如何ですか。

私は現在御縁があつて竹本越道先生のもとで月四・五回お稽古をして頂き私の大好きな壺坂観音霊験記壺坂寺の段を習っています。お里さんの嘆き悲しみ、泣くところが非常にむつかしくて困っていますが少しでもうまくなって次回OB会には観音様の御利益を下しくそながら皆様にお聴かせすることを楽しみにしております。(落語の寝床ではないぞ)

教室OBの皆様、新しい45期生の新人達よ、世界に冠たる芸の司 義太夫節の腹からの声で、太棹の輝やく音色の三味線で、少しでも世の中を明るく景気よくしようではありませんか、頑張りましょう。

(七十七才の青年より)

パニツク!! パニツク!!

鶴 澤 悠 美

第四十四期義太夫教室上級が終了しました。人様からお稽古して頂く機会の方が遥かに多い私に、三十名弱という多人数の団体稽古なことでできるのかしら?と底知れぬ不安を抱きながらも、持ち前の好奇心(弥次馬根性)と「義太夫節普及、協会発展のためです!!」という説得力あるお言葉につき動かされて、三味線コースの講師を勤めさせていただいたのですが……

険しい道のりでありました。ともかく、一対一であるべきが一对三十なので。本来、楽器の手ほどきやレッスンは教える側、教えられる側双方が神経を集中して勤を働かせ合い、活発なやり取りが行なわれるべきものだと思います。教える方がこだわりを持つほど要求は無限に湧いてくるし、またそれを受け止める方もそれぞれに個人差があり、指導方法も相手次第で千変万化しようというもの。特に、太棹三味線のような難儀な楽器のこと、普通以上に気を使わなくてはならないことは目に見えています。それを三十人一緒くたなで無茶苦茶だ!!! 教壇(?)に座って受講生の皆さんと相対したそ

の時点から私の「苦悩」(?)は始まったのでした。目の前のごく近くに座っておられる二・三名の方はまだしも、残りの大部分の方とは距離が離れるほどにコミュニケーションの密度がどんどん希薄になってしまふのです。ひと所に座りっぱなしでは、一局集中型人間の私としては、三十人の最大公約数という実態のない虚像と向き合うことになってしまふので、生徒さんたちの間を歩きまわり(結構汗だく!)、なるべく個別指導の形もとるよう努めたつもりでした。が、限られた時間を一人一人に公平に配分しなくてはならなくて、一つの課題について全員がマスターできなくても、結局は時間切れで次の課題に泣く泣く進むほか仕方なかった——というのが本当のところ。弾ける人、弾けない人、様々の中で、どのあたりのベースに合せて全体を進行するかといえば、やはり平均値に合わせるしかなかったという訳です。

楽器、コマ、撥などは中古品を協会から貸し出すシステムで、必ずしもコンディションが整ったものばかりでなく、糸巻きが戻ってしまったり、棹が折れ(?)たり、皮が破れ

たり、撥の耳がとれたり、と音を出す前から大騒ぎ！ 調弦がまた一大事業で、「えーいめんどくさい！」とばかり三十挺全部を自分の手でチェックしてまわっていざ弾く段になると、既に調子が狂っていてあちこちから色んな高さの音が一齐に湧き出する始末（助けて〜）!! その上、ひとたび三味線を手にすると皆性格が豹変（？）するらしく（必死になるあまり、まわりが見えなくなるらしい）自分の世界にのめり込んで弾いておられるので、「ちょっと静かにして聞いて下さい！」という私の悲痛な叫びもあえなく大音響に掻き消されがち。なにを負けじと頓狂な金切り声で辺りを制するといった具合でした。（思えば日々是数の暴力、音の暴力との凄じい戦いであった……）毎回、体力・気力・エネルギーを使い尽くしてへとへとになりましたが（喉の痛みが特に激しかった）、稽古の成果を発表する教室OB会が近くなるにつれ、目標に向かって全体の音と気持が一つになってきて（自分の中の諦めもついで）、精神的にはだんだん楽になっていきました。（因に、発表会で三味線大合奏の指揮を舞台の横で行えたことは、大変貴重な体験でした。）

義太夫節普及のためとはいえ、もともと無理なことを敢えて行なうからには、目をつぶって切り捨てなくてはならない部分が多く、神経が細かい？私（デリケートなんです）としてはなんだか納得がいなくて、どこかすっきりしないもやもやが残ってしまいました。でも、生徒さんたちの「弾けるようになった

い!!」という汚れない純粹な情熱がとても新鮮で美しく、そういう意味では本音と建前がいつも食い違い、嘘ばかりの芸界の場、手垢にまみれた虚礼だらけの邦楽・邦舞界の中にいるより楽だったように思います。

不慣れた講師で色々迷惑をおかけしましたが、半年間どうもありがとうございました。教室関係の先生方、お手伝い下さった正会員の方々、大変お世話になりました。そして、三味線が楽しく弾けるようになって、とうとう太掉菌にとりつかれた生徒さん、どうも自分には太掉は合わないようだと思いつつも、足の痺れを我慢して一所懸命お稽古を続けて下さった生徒さん、皆様にお目にかゝれたことを感謝しております。



全身で指揮をする悠美教師

(助川政子氏撮影)

44期卒業アンケートより

- 一番新しい教室OBです。この3月に卒業した人、今も弥乃太夫・朝重・綾一・悠美・錦輝各師について続けている人、様々ですが、参加人数が新記録を樹立した44期でした。
- *義太夫に限らず伝統芸能は習ってみたいと思っても、なかなかその手がかりがつかめないものですが、その中でこの義太夫教室は入り易かったです。
- *最近の伝統芸能ブームで、今年は特に生徒さんの数も多かったようですが、できればもう少し個人指導に近い形で御指導いただければよかったですと思います。
- *毎週最高の楽しみでした。声を出すこと、語ること、次々色んな発見があって、義太夫ってほんとうに凄い芸能だと思えます。
- *久しぶりで学生時代に戻った様で楽しかったです。普段全く縁のない事が出来たし、OB会では、袴を着て舞台に出るといいう一生に一度あるかどうかという良い経験をさせてもらいました。習い事は、いずれにしても発表する機会がないとダメだと思いました。
- *練習は合同でやるとしても、舞台はAB二班に分けたらどうかと思いました。
- *年令も性別も関係なくみんながひとつになつて出来る事が素晴らしい……長くつづけていきたいと思えます。
- *スペースアルファは「第二の学校」でした。今年を受験生ですが、ぜひ又、演奏会や文楽などを見に行きたいと思えます。

芸団協助成新人奨励賞

花開け誠実に

棚野正士

人にはまことに誠実な人がいる。人にはまことにまじめな人がいる。団体も人と同じでそれぞれに性格をもって。わたくしはいつも義太夫協会に人に感じる誠実さ、まじめさを感じ心温まる思いでいる。

その義太夫協会がわずかな芸団協の助成金を有効に生かして、毎年「新人奨励賞」を出されている。

今年は鶴澤津賀寿さんが受賞された。たおやかなお嬢さんである。

受賞記念に「壺坂観音盃験記」の三味線を演奏されたが、大先輩の師匠たちに伍して見事である。満員の客席の心をしっかりとつかまえた。

大切な芸術である義太夫が協会の誠実な活動、そしてこうした若い演奏家の活躍で花開くと信じる。大きい楽しみである。

(芸団協 理事・事務局長)

今年の新人奨励賞の鶴澤津賀寿は、36期、「芝居じかけのじょうり」の竹本越若も25期、ともに義太夫教室の出身者。「パニックパニック」の鶴澤悠美も32期生でした。

越若池袋の夜に

大いに「語る」

相談役 池田弘一

三月三十一日の夜、池袋のアクト・セイゲイを満員にして「芝居じかけのじょうり」と銘うった竹本越若の会が催された。

本牧亭以来の定連の姿も見かけたが、どこからどういつて来たかわからない、義太夫は初めてといったふうのお客が大半を占めていた。「芝居じかけ」というタイトルをこの人たちはどのように承知して来たのであるうか、大いに気になるところではある。

何はともあれ、われわれは越若の義太夫への思い入れ、悩み、訴えを十分に聞かされてしまったのである。異常ともとれる静寂と緊張のうちに時は流れた。これは日ごろからの越若の真摯な姿勢がしからしめたのだとも評価できようが、一方では義太夫という異文化を初体験した異邦人的存在の人たちと、義太夫を知り、ぎてしまった、これまた一種の異邦人的存在の人たちとの双方があっけにとられ、とまどいしての結果だとの異論があるう

りやも知れぬ。素丸・悠美その他の協力はあったにしても結局は越若一人の仕事であり、自作・自演、きりきり舞いの一時間半であったことに間違

いはない。従ってそこには整理しきれないものが残った。自作・自演までは出来ても、自ら演出し、自らを監督することは至難のわざである。結果として冗舌となり、幻のお弓と悩める義太夫節修業者とのやりとりもくどくなつた。演者としての越若は疲労し、その疲労は十分の休憩をはさんでの「鳴戸」にも影響した。せつかく今日まで蓄積してきた越若の、いわゆる義太夫の「芸」は発揮しきれなかった。悠美の三味線で「鳴戸」のほぼ全曲を語り終えたのは九時。

この催しに破綻ありとするならば、その原因は演出者・監督者を欠いたところにある。しかし、その破綻をも承知のうえで体当たりを実践した越若をいとしく思う。そして暗がりの中の協力者の労をねぎらいたい。

「こんな騒ぎをする暇があったら義太夫そのものの修業にはげめ」という聞き巧者の声も聞こえてくるような気がする。しかし、ここに義太夫節への窓口を見出し出した層が必ずあったことを私は信ずる。

私はこの会を、結局人間は「おしきせ」では生きられないということを認識させてくれた会として思い出に残した。「大切な時間をありがとございました」という添書きのある礼状がすぐに届いた。私なんかも人さまの「大切な時間」を盛んに奪って生きている。だから、これからも越若のような人たちに私のささやかな時間を大いに奪われよう、奪ってほしいと願うのである。

(神田外語大学教授)

竹本綾之助師逝く……………

竹本綾之助を語らずして女流義太夫の歴史を語ることはできません。その三代目竹本綾之助師(本名大澤ハツエ)が亡くなりました。昨年暮の「忠臣蔵」由良之助と今年初春公演の「寺子屋」千代には出演予定だったので、から、全く突然の悲報と申せましょう。

葬儀は自宅近くの「新井薬師」にて。初代が人力車で掛け持ちをしたという昔の寄席を彷彿とさせるように、提灯の灯った新井薬師山門、その名も「大悲殿」という斎場には生前の「新口村」が流されて、悲しい中にも何か華があるのは、満開の八重桜の故ばかりではありません。どなたの心遣いか、色とりどりの折鶴に飾られた棺の中の三代目は、実に美しく眠っておられました。一番弟子・綾一さんへの最後の言葉は、三味線を弾く手つきをしながら「頼むわね」だったそうです。義太夫協会・義太夫節保存会、国立劇場、NHK邦楽班、劇団新派等々各界からの生花文化庁、松竹会長等々からの弔電、そして駒登久師を中心に女流有志による「野崎村」の演奏で出棺のお見送り……心を込めたお別れでした。御遺族はじめ参列者の胸を一際うったのが竹本土佐廣師からの弔電と、池田弘一協会相談役(神田外語大学教授)が読み上げられた弔詞です。ここに再録させていただきます、師の御冥福を祈りたいと存じます。

弔詞

女流義太夫の大輪の名花たりし三代目竹本綾之助師の霊前に謹んで弔詞を申し述べます。あなたは、大正九年、初代竹本綾之助師に入門、竹本綾枝を名乗って初舞台を踏まれて以来七十年、義太夫節研鑽の道を一筋に歩まれ昭和三十七年、女流義太夫界きっての大名跡竹本綾之助の三代目を相続され、初代の直接の薫陶を受けた数少ない貴重な存在として、女流義太夫の本城である本牧亭の舞台に演奏活動を展開され、また協会の発展、後進の指導に尽力なさいました。本牧亭閉鎖の後には国立演芸場の舞台に於て品格高くしかも滋味あふれる風韻を以て聴衆を義太夫節の三味境に誘ったのであります。師を尊び、綾之助の名と義太夫節をいつも大切にしておいでだったあなたは決して軽率なる稽古で舞台にあがることをせず、周囲の者がご健康を気遣うほどに工夫を重ねられ、夜を徹して先人のテープを聴くなどなされたといえます。

綾之助という美しい名にふさわしくあなたはいつも美しく端麗であられました。本牧亭時代、綾之助出演とふれるとフリの客が増えたということはまぎれもない事実であり、あなたの魅力と人気的一端を示す懐しい思い出であります。また、義太夫節に関する新派

の舞台には常に綾之助さんの名があり、協力がありました。あなたは重要無形文化財総合指定保持の第一人者として、社団法人義太夫協会常務理事として、芸団協芸能功労賞の受賞者として、充実した芸の人としての生涯を貫かれました。義太夫協会は今偉大なる先輩を失って暗然たる思いを禁じ得ません。しかし、朝重・駒之助二人の副会長は協会の発展に愈々尽力されましょうし、あなたの直弟子竹本綾一の芸境の進展は著しく、今やおしもおされもせぬ立派な義太夫夫人であり、語り手であります。綾貴世も師風に従って先輩の導きを得てまっすぐに芸道をあゆんでおります。綾之助さん、どうぞお心静かにお休み下さいますように、そして義太夫協会の進展と門弟たちの芸の進歩成長をお見守り下さいますように、心から哀悼を捧げつつ弔詞といたします。

平成四年四月十五日

社団法人 義太夫協会

弔詞を読む池田弘一氏



(和田博氏撮影)

人間国宝・竹本土佐廣師は、満94才をむかえ、会員の皆様にお目にかかれるようにと、毎日リハビリに励んでおられます。皆様にごうぞよろしくとの御伝言が届いております。

*

あやのすけさん とつぜんのことで わたくしはおどろき とてもかなしく さんねんでたまりません また おちゃをのみながらむかしはなしをしたり おけいこをしたりできると しんじておりましたのに ただただかなしくてなりません としからいってもしんじが かわってあげたかったのに ごしんじんぶかい あなたのことで かみがみのおめぐみで とてもよい ごじょうぶつをなさったことと おもっています
さよなら さよなら
ごめいふくをいのります
たけもと とさひろ



故竹本綾之助師

心身障害児のための特別公演
チャリティ

大変遅くなりましたが、下記の通り御報告いたします。募金は、社会福祉法人NHK厚生文化事業団を通じて、有効に活用されることになっております。御協力、有難うございました。

(1991.12.21)

[報告書]

会場募金箱	85,436円
協会扱御寄付	112,000円

[内 訳]

竹本弥乃太夫御一門様	50,000円
竹本綾之助後援会様	20,000円
神田外語大素八を聴く会様	15,000円
中島 古平様	10,000円
坂東八十助様	10,000円
和田 博様	5,000円
小林 敏子様	2,000円

合計 197,436円

*尚、今回もプログラム印刷一切は、高野俊雄氏(女流義太夫後援会)の御寄贈になるものです。

明治41年 2月25日誕生
大正9年 初代竹本綾之助に入門、綾枝
昭和3年 結婚等のため一時中断
24年 義義太夫再開
37年 三代目竹本綾之助を襲名
49年 社団法人義太夫協会理事
55年 重要無形文化財「義太夫節」総合指定保持者
58年 社団法人義太夫協会常務理事
61年 芸団協芸能功労賞
平成4年 4月12日 勲五等瑞宝章
4月13日 呼吸不全のため逝去
紫伯壽綾大姉(享年84才)

芸 歴

謹んで御冥福をお祈りいたします。



合 掌

協会の動き

'92年1月より
'92年5月まで

「平成3年度」

1月8日 義太夫節保存会文化財保存事業
平成4年度概算予算提出

1月12日 公演部会 於事務局

1月16日 芸術文化振興基金平成4年度助成
金交付要望書提出

16日 公演部・国立演芸場打合せ
於国立演芸場

1月21日 正会員・役員新春挨拶交換会
席上、第7回豊澤仙広賞授与式
受賞者の鶴澤寛八理事は、昨年末
転倒、遠出が困難だったため、愛
弟子の寛輔・寛也が代って授与式
に臨んだ。於国立第一演芸研修室
女流義太夫演奏会初春公演（芸術
文化振興基金助成）特別出演！
西川雅恵・望月久恵社中

1月22日 於国立演芸場
第11期歌舞伎俳優研修・第11期竹
本研修終了発表会（竹本道太夫終
了）第12期竹本研修発表会
於国立小劇場

1月24日 公益法人会計基準説明会
於北とびあ



仙広賞を授与する吉川名誉会長（高野俊雄氏撮影）

1月25日 学校巡演 於小川中

1月28日 公演企画委員会 於文明堂

1月31〜2月5・7日 女流後継者育成事業
野崎村研修（野澤喜左衛門師指導）
於国立劇場

2月12日 演舞場稲荷初午祭

2月21日 第11回伝承者研修発表会（義太夫
節保存会主催、義太夫協会後援、
文化庁・東京都助成） 竹本弥栄
（竹本弥乃太夫門下）初舞台
於国立演芸場

2月22日 第3回竹本土佐廣となごむ会
於茅場町東京証券会館ホール

2月26日 義太夫節保存会平成3年度文化財
保存事業実績報告書提出

2月28・3月1〜6日 女流後継者育成事業
熊谷桜研修（野澤喜左衛門師指導）
於国立劇場

2月29日 第7回義太夫教室OB演奏会―第
44期生卒業発表―義太夫教室OB
会主催・義太夫協会後援 全部で
24高座の演奏が続いた。
於東京都勤労福祉会館ホール

3月1日 公演部会 於事務局

3月6日 '92都民芸術フェスティバル 第22
回邦楽演奏会 女流が出演した。
於朝日生命ホール

3月13日 平成4年度民間芸術等振興費補助
金概算要求
於朝日生命ホール

3月16日 義太夫教室第44期 上級コース修
了式 語り28名 三味線28名卒業
これまでの最高新記録（10頁参照）
於演舞場スペースアルファ

3月17日 定例理事会 於布善俱樂部

3月18日 第11期歌舞伎俳優・11期竹本研修
生あげざらい 於国立演芸場

3月19日
3月20日

三味線総点検 堀込三枝店出張
女流義太夫演奏会 鶴澤津賀寿芸
団協助成新人奨励賞受賞記念(芸
術文化振興基金助成) 11頁参照
開演前舞台にて表彰式を行なった。
於国立演芸場

鶴澤津賀寿



(佐藤ゆり江氏撮影)

3月23・24日

京橋税務署 源泉税調査
於事務局

3月26日

第20回邦楽実演家団体連絡会議
於芸団協会議室

3月30日

平成3年度民間芸術等振興費補助
金実績報告書提出

〔平成4年度〕

4月2日

常務理事会 於事務局

4月10日

平成3年度東京都文化財保存事業
費補助金・同文化財保存事業費国
庫補助金の額の確定通知

4月22日

女流義太夫演奏会 於国立演芸場

4月23日

平成4年度民間芸術等振興費補助
事業計画に関する事情聴取
於文化庁特別会議室

5月1日

京橋税務署源泉税調査 於事務局

5月6日

平成3年度芸術文化振興基金助成
金の額の決定通知(3月31日付)

5月2日

回向院墓地整理工事落慶法要 女
流義太夫が奉納演奏を行なった。
(16頁参照) 於回向院

5月9日

公演部・ひとみ座・国立演芸場打
合せ 於国立劇場

5月16日

義太夫(語り)の一日体験教室
講師―竹本駒之助
於スペース・アルファ

5月19日

定例理事会 於布善倶楽部

5月22日

義太夫協会会報第53・54合併号
発行

クイズ クイズ クイズ



私は誰でしょう?

*ハガキまたは電話で、6月末日までに事務
局へ *三名様に女流義太夫演奏会御招待
券進呈(正解者多数の場合は抽選です)

へおめでとうございます

第13回松尾芸能賞 伝統芸能特別賞
歌舞伎義太夫の豊澤重松師が受賞。2月27
日授与式が行なわれました。
(松尾芸能振興財団主催)

新刊書御紹介

浄瑠璃史考説(井野辺潔著)

従来の国文学の「読む」立場からの研究で
はなく「聴く」「観る」視点からの音楽学
的立場からの論考十七篇
風間書房刊(九八八八円)

歌舞伎音楽の研究―国文学の視点―

(景山 正隆著)

歌舞伎の囃子と義太夫節の史的位相と本質
を究明。歌舞伎音楽の歴史、江戸と上方の
違い等をはじめ、特に丸本歌舞伎研究には
必須の研究書 新典社刊(一七五一〇円)

邦楽と舞踊の
レコードは

文化堂

(都内・地方発送の御用承ります)
〒104 東京都中央区銀座5~14~1
(歌舞伎座前)
TEL (3541) 8325・8326

回向院で奉納演奏

初代竹本義太夫をはじめとして、著名人が数多く眠る両国の回向院で、大々的な墓地の整理工事が行なわれ、5月2日、その落慶法要が営まれました。

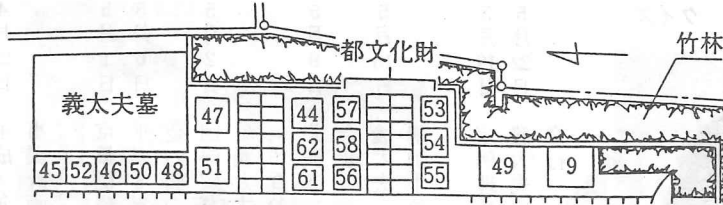
初代の墓所と犬猫供養塔は変わりませんが、その他義太夫関係者が初代を囲むように大幅に移動しましたので、あたかも「義太夫コーナー」のようになっていきます。(下図参照)同時に、三百三十余年の歴史を現代・未来に生かすべく編纂された「回向院史」という寺史も刊行され、義太夫協会にも寄贈されました。さて、法要のあらましは……

モダンなつくりの山門をくぐると、晴れた日差のなか檀家の皆さんが賑々しくお集り中華やいだ雰囲気です。

屋外で行われた法要、型やぶりとは聞いていましたが、いきなり黒のロングスカートのコーラス隊が歌いだしたのは驚き。コーラスと読経の声とお坊さん達の演奏する笙、ひちりきの音が一体となった法要パフォーマンスでした。

場所を本堂に移し、講談の一龍斎貞山氏が奥様が回向院の幼稚園の先生だったご縁などまじえて一席。続いて当協会相談役・池田弘一氏の解説。義太夫節とは何かからはじまって竹本義太夫のお墓のある回向院さんと協会のご縁をお話になり、野崎村のあらすじを説

明された上、しっかり国立公演の宣伝までして下さいました。手短でわかりやすい解説に檀家の方々もうなづきながら聞いて下さり、義太夫への興味も深まったところで女流若手による奉納演奏「野崎村」。場所の都合でなんとご本尊さまにお尻を向けて居並んだ四丁四枚の肩衣姿。檀家の皆さんお寺の皆さんに喜んで頂ける演奏となり何よりでした。(註)



- | | |
|--------------------|-----------------|
| 44 和田家之墓 (竹本咲太夫之墓) | 54 橘千蔭墓 |
| 45 竹本誠太夫墓 | 55 芳宜園橘翁墓誌銘 |
| 46 竹本八十太夫の墓 | 56 岩瀬京伝の墓 |
| 47 竹本阿波太夫墓 | 57 岩瀬氏光墓 |
| 48 鶴澤文の墓 | 58 岩瀬京山の墓 |
| 49 豊澤團八碑 | 59 天神真楊流柔術山本四郎碑 |
| 50 竹本大和太夫墓 | 60 紫紅瑠草馬勝浦万豊供養塔 |
| 51 竹本津賀太夫他墓 | 61 六代目竹本組太夫墓 |
| 52 竹本紋太夫之墓 | 62 三世竹本津太夫墓 |
| 53 加藤氏塚 | 63 唐犬八之墓 |

(回向院史より)

〈寄 贈〉

- | | | | |
|-----------|---|-----------|-----|
| トラベルメイツ社様 | 20世紀フォトドキュメント9「芸術」 | (株)ぎょうせい刊 | 11点 |
| 榊原 功様 | 女義公演プログラム | 新春挨拶交換会景品 | 6点 |
| 小泉 嘉子様 | 義太夫協会公演プログラム | | 2点 |
| | 旧義太夫協会会報 | | 2点 |
| | 本牧亭番組 | | 2点 |
| | (連載中の「女流義太夫共和会あれこれ」に、昭和35年以前の資料がないことが書かれていました。それを読まれての御寄贈です。いづれも古いものばかり、女義の歴史の空白を埋めることができそうです。有難うございました。) | 資料記録部) | |
| 助川 政子様 | OB演奏会 | 写真 | |
| 野澤 松也様 | アガリ糸 | | |
| 城川 坦子様 | 文楽プログラム・床本(古いものから最新のものまで) | | |
| 和田 博様 | 竹本綾之助師告別式 | 写真 | |
| 諸宗山回向院様 | 回向院史 | | |
| 高野 俊雄様 | 仙廣賞授与式ほか | 写真 | |
| | 女流義太夫ポスター(2色) | | |
| | 印刷一式 | 千二百部 | |
- (高野常任相談役御寄贈のポスターが二年半たって定着、威力を発揮し始めています。国立劇場・歌舞伎座・文化堂・弁松・大野屋・下町風俗資料館等々、御協力有難うございます。)
- 公演部)

義太夫かるた 中島古平氏が絵札を

5月3日、朝日新聞都内版に「けいこ60年「義太夫かるた」5年がかりで完成 愛好者の間で人気」という記事が掲載されました。かるたの絵札を描いたのは、中島古平さん。古平さんといえば、前々からの義太夫協会会員で、現在は参与、義太夫教室3期卒業、素義界では知らぬ人は無いという存在。

美麗な「かるた」には、人間国宝・竹本土佐廣師の推薦の言葉が添えられています。

「八十歳を過ぎたお二人（編集部注・中島古平氏と杉崎まつ氏）が誰の力も借りずに、義太夫に対する愛情と熱意をこのような形で示されたことには、全面的な敬意を表さずにはいられません。（一部抜粋）」

御希望の方は左記へ。実費で分けて貰えますが、残部僅少とのこと。

パナ出版企画（三三七九―三二一九）



「義太夫を教えて」と 各地農村歌舞伎から

「故郷創生」の一環なのでしょいか、全国各地で農村歌舞伎を復活させる運動が広がっているようです。芸を伝える人は、高齢化してはいてもまだ何とか健在、衣装や舞台装置などは割合いい状態で保存されている、問題は義太夫を語る人と三味線を弾く人がいない……：：：こういう声をしょっちゅう耳にします。四国から、義太夫教室に通いたいが無理なので通信教育をして貰えないかという手紙が届いたりもしています。義太夫教室OBの組織化という課題と結びついたら、どんなことになるでしょうか。皆様の御意見をお聞かせ頂ければ幸いです。

『一日体験』お申込み殺到!!

事務局はうれしい悲鳴

5月16日の「義太夫の一日体験教室」、24日の「三味線の一日体験教室」、6月1日、7月24日の「義太夫教室第45期初級講習会」いづれもお申込み殺到、まだまだ増えそうな勢いです。定員オーバーなのでお断わりしても、「座ぶとんに座れなくてもいい」「見学だけでも」等と迫られると、気の弱い(?)事務局は「では、一応……」等とついつい受けてしまっ「明日からはゼッターにお断りだ!」と決心している毎日です。結果は次号に掲載の予定です。

「短 信」

◇芸能学会の役員決定

池田弘一氏（義太夫協会相談役）・粟屋朋子氏（義太夫協会賛助会員）が常任理事に（新任）、景山正隆氏（義太夫協会監事）・館野善二氏（義太夫協会相談役）が理事に（再任）、山岡知博氏（義太夫協会相談役）が監事に（再任）就任されました。

◇義太夫協会総会（役員改選）

6月27日（土）11時 文明堂築地店

◇義太夫教室OB演奏会 日程決まる

平成5年2月27日（土）

東京証券会館ホール（茅場町）

編集後記

前号後記で予測した（予防線を張った）とおり、発行が4年度にずれこみました。かねてよりの企画「義太夫教室特集」は、初級開講日までは出さねばと決意した（無言の圧力をかけられた）結果が、この53・54合併号です（こういう手もあった!）。強いて分けるなら教室関係部分が53号でしょう。全18ページは46号「本牧亭特集」に並ぶタイ記録です（三ツ折りにして郵送する人のことを忘れるな!!）。色々カゲの声が聞こえますが、やれやれとホッとしています（ヘトヘトです）。会報編集で一番気が重いのが計報欄。ありませんようにと毎号願うのですが、突然届いた綾之助師の悲報、こういうホットニュースはごめんです。次号は新役員の御報告になると思います。